

——特集にあたって——

ハンス・クリスチャン・アンデルセン原作の童話、「**みにくいアヒルの子**」をご存じの方も多いと思います。アヒルの群の中で、ほかのアヒルと異なった姿で生まれた「みにくいアヒル」の成長物語です。物語の詳細は原作を参照いただくとして、ページをめくる前に一つだけ考えていただけたらうれしいです。

——「**みにくいアヒルの子**」と「**ふつうのアヒルの子**」は、何が異なっているのでしょうか。

真っ先に思い浮かぶのは**体の色**や**体格**かもしれません。しかし、**目の色や形**、**くちばしの長さ**など、「みにくいアヒルの子」と、「ふつうのアヒルの子」を比較する際に着目すべき視点は、よくよく考えれば無数にあるはずです。なぜ僕たちは、体の色や体格の違いに注目しがちなのでしょうか。

その理由は、僕たちがアヒルの専門家ではないからです（専門家の方がいらしたらすみません）。ある二者の比較とは、両者の間に、何らかの関心に基づく視点（観点）をもち込み、その視点を足がかりに差異を見いだしていくプロセスです。しかし、比較する視点は無数に存在しており、どの視点を重視するかは、比較を行う人の「関心」に依存してい

ます。そして、着目する視点への「関心」とは、**ある種の専門性**にほかなりません。

薬の「あれ」と「これ」を比較する際の視点も無数に存在します。専門知識をもたない一般の方からすれば同じようにみえる薬も、薬剤師にとってみれば、薬理作用、薬物動態、用法・用量、潜在的な有害事象リスク、合併症に対する有効性など、人の生活に直結する「違い」から、ミクロな生物学的・化学的な「違い」まで、多様に論じることができるはずです。そういう意味では、**薬の比較を多面的に論じることが、薬剤師としての専門性そのものです。**

本特集では、各疾患領域のエキスパートに薬物療法の比較をわかりやすく解説していただきました。薬剤師の臨床業務において、薬を比較する機会は多いはずです。どのような視点に注目して薬を使い分ければよいのか、思い悩んでしまうこともあるでしょう。ぜひ、本特集を活用いただけたら幸いです。

中野病院 薬局

青島 周一